

令和3年度 第2回京丹波町総合計画審議会 議事要旨

開催日時	令和4年2月9日(水) 14時00分～16時30分
開催場所	京丹波町役場 大会議室
出席委員	山田委員、春田委員、山内委員、小峰委員、安谷委員、庄崎委員、嵐委員、湯川委員、山本委員、長谷川委員、沖委員、杉浦委員、谷委員
欠席委員	竹吉委員、樋口委員、津田委員、湊委員
事務局 理事者	中尾参事、松山課長、山内課長補佐、下村 畠中町長

【会議資料】

- 資料1 京丹波町総合計画審議会委員名簿
- 資料2 京丹波町総合計画審議会部会編成
- 資料3 第2次京丹波町総合計画後期基本計画策定に向けた基礎調査
- 資料4 第2次京丹波町総合計画後期基本計画策定に向けたアンケート調査
- 資料5 第2次京丹波町総合計画後期基本計画策定の流れ

【次第】

1. 開会

あいさつ（春田町長）

ご多用のところ、総合計画審議会にご出席いただきありがとうございます。連日のように、コロナの感染拡大や防止について報道され、現状と必要な対策が論議されている。蔓延防止が続く中で、本会議の開催についても悩んだところだが、感染防止対策を行ったうえで、開催することとした。今回、総合計画の策定に向けて、京都府立大学の宗田先生から講演をいただく。また策定の現状についても共有する。総合計画の進捗状況の確認については、事前に意見書を提出いただいている。コロナ禍の中で、時間短縮の会議となるが、活発なご意見をいただき、実のある内容としたい。

2. あいさつ（畠中町長）

平日のお忙しいところ、総合計画審議会にご出席いただきありがとうございます。また常日頃、町行政の推進にご理解いただいております。自身は熱い想いを持って、町長職に就任した。令和4～8年度の総合計画の後期基本計画の策定に向けて、準備を進めているところである。まちづくりの大元になる総合計画について、皆様のご意見をうかがい、まちづくりに生かしていきたい。本日は府立大学の宗田先生からのお話をお聞かせいただく。皆様の議論に生かして

頂きたい。本町は過疎化が進んでおり、国勢調査の人口においても減少率が府内で3番目に高い。では、京丹波町は魅力がないかという点、そんなことはない。この町は、京都府のヘソに位置し、府内の南北の人が交流する人の中間地である。周辺の自治体はすべて市であり、京都市にも近い。地理的に恵まれ、農産品があり、人柄の良い住民性もある。一方で、現在は人口が1万4千人以下になっている。この事実を受け止め、町の魅力を高め、掘り下げて、まちづくりのバネにしていくことが重要である。自身はまちづくりの3つの柱の一つに「食のまち」を上げている。ここにエネルギーを注ぎ込みたい。食は健康につながる、健やかで幸せな食のまち、健幸のまちをコンセプトにしたい。人口が減り、高齢化率が高くなる中で、健康寿命を伸ばし、皆様に元気に過ごして頂きたい。そのために健幸のまち、ウェルネスタウン構想を進めたい。具体的には、整理統合の対象になっていた京丹波病院を町の基幹病院として守り育てたい。また、食のまち、フードバレー構想を進めたい。食品産業を集積し、働く場をつくり、地域の農産物の加工場とし、全国に発信したい。これによって京丹波のブランドも高まる。フードバレーは全国でも北海道の十勝、京都では宇治などで取り組んでいる。京都府でも、食の京都というキャンペーンをしている。京都府ともうまく連携しながら、まちづくりに生かしたい。また、京都府は総合計画の中で、亀岡・南丹を含めた2市1町のエリアで京都スタジアムを核としたスポーツ&ウェルネスタウン構想を定めている。これに呼応して、取組を進めていきたい。京丹波町を日本で有数のスポーツウェルネスタウンにしたい。もう一つの柱が、教育と子育てのまち。「ひとづくりはまちづくり、まちづくりはひとづくり」である。教育は即効性はないかもしれないが、生きる力を持った子どもを育てることは大人の義務である。そのためには教育環境を整える必要がある。学校をよくするだけでなく、全人教育、ふるさと教育について町民すべてが先生となり、地域ぐるみで子育てを行う環境をつくる。これによって、子どもたちの町への愛郷心が育ってくる。京丹波ナショナリズムを定着し、将来京丹波に戻ってくるようなまちづくりをしたい。最後は「ひとのふれあいを感じるまち」である。過疎化が進めば進むほど、町民同士の対話を深め、信頼関係を築くことが大切。お互いに励まし合うことのできるシステムをつくりたい。そのために、行政と町民の距離感を縮める。町民の中に行政が入り込んでいくことが必要。私自身が町民の方と対話をしていきたい。各種団体の皆様とも、積極的に交流をしていきたい。お互いに仲良く、励まし合って、笑顔あふれる街になれば、もっと良いまちになる。元気がなければ、人も企業も来ない。人口減少、高齢化といった嘆きばかりでなく、町の良い面をみて、元気を出せば交流人口も増える。人口減少は全国どこでも同じ。これからは行政と町民が一緒になっていかに元気を出すかが重要。そのためには、行政職員ももっと勉強し、俯瞰的に、客観的に町を見る力をつけてほしい。これが私の考えである。

3. 委員の紹介

4. 協議事項

①第2次京丹波町総合計画後期基本計画の策定に向けて

○基調講演（京丹波町総合計画審議会アドバイザー 京都府立大学 宗田教授）

○総合計画後期基本計画の策定に向けて

事務局：「資料3」「資料4」「資料5」を用いて説明。

②京丹波町総合計画の進捗等について（意見の報告等）

委員：農業の立場からの意見を言う。高齢化が進む中で、農業の担い手の問題がある。所得が問題。米価が下がっており、コメ農家はかなり厳しい。農地の集約化等、大きな枠組みを考える必要もある。京丹波ブランドは、栗や豆もあるが、おいしく新鮮な新しいものが必要、それが特産化につながればいい。ふるさと納税にもつながる。町長がおっしゃっているフードバレーを実現するには、専門的なチームをつくっていただく必要がある。丹波地区は昔から諦めが早い。いろんな取り組みはされるが、例えばアスパラガスも途中で断念した経緯がある。JAに頼るのではなく、農家自身も考える必要がある。宗田先生のお話にもあったが、都市計画、土地利用について、市街化区域の区分決定などをしてもいいかもしれない。味夢の里から自然公園までをつなぐということも、夢物語かもしれないが、考えてもいいのではないか。

委員：自身は女性の会から来ている。姑などとの同居は難しくなっている中で、子どもの夫婦が地元に戻ってくるという方は少ない。会員の家族の中でも、仕事の都合などもあり、京丹波町以外に住んでいる方が多いと聞く。空き家が増えてきていることも考える必要がある。

委員：商工会は、会員400弱いる中で、後継ぎがいない業者が多く、廃業に追いやられている。人口減少で、商店街はまるっきりダメになる。建設業はハローワークで募集しても、応募が10年で1件もなかった。以前、旧役場の裏の町営住宅に住んで従業員として働いてもらうという仕組みも考えたが、所得制限で断念した経緯もある。制度を変えることができるといいのではないか。農業で食べていくのも難しい。京丹波町ではかつて松茸があったが、今は難しい。栗は京丹波ブランドとして維持していきたい。農業だけでなく、商工業とも連携すれば、さらにブランド価値が高まるのではないか。

委員：自身は観光協会から来た。車で京丹波町内の観光地に行こうとしても、観光案内がなく、どこにあるのかよくわからない。観光地を見つけられない。そこから飲食店等につなぐ仕組みもない。観光客を呼ぶなら、観光案内の看板は最新の情報に更新し、QRコードを付けるなどすれば、町全体を循環するお客さんが増えるのではないか。自身は農業もやっている。農業の製品には規格があるが、規格外の作物がたくさんとれる。豊作貧乏で、虫食いなどをすべて廃棄している。そうした食品の加工施設があると良い。個人で加工施設を建てるには数百万円かかる。例えば栗を商工業に回すだけでなく、農家が栗を加工し、売り上げを増やすことも重要ではないか。また、宗田先生からエネルギーの地産地消の話もあったが、京丹波町は森林資源に恵まれており、カーボンニュートラルどころかオフセットである。今後は火力発電ではなく、再生可能エネルギーにシフトしなくてはいけない。例えば公共施設にソーラーパネルを設置し、発電する。余った電気を売電する。そうする仕組みができれば素晴らしいと思う。そのイニシアチブを公共施設からとっていただきたい。公民館にパネルを設置すれば、電気自動車が増えたときに、公民館で充電できるという仕組みにも発展できるのではないか。

委員：新しいものを作り出すのは、お金もかかって難しい面もある。京丹波町にはたくさん資産がある。農産物では栗等、施設については古い学校等もたくさんある。他にないような資産をしっかりと見直し、ブランド化、充実していくといいのではないか。農産物については、日本一

のものがなく、もう一度見直す必要がある。日本一でないとしたら、日本一にするために何をするのかを考えるといいのではないか。また人も資産で、そうした方たちのアイデアを取り入れていく必要もある。自身は京都銀行に属しているが、外部の機関の力が必要であれば、そうした機関につながるの銀行の仕事でもある。お声がけいただければ、お手伝いしたい。出来上がったものをアピールすることも重要。人を呼ぶことも、企業を呼ぶことも、大声を出さなければ寄っても来ない。この点もお手伝いしていきたい。

委員：自身は介護福祉士だが、移住者代表でもある。エネルギーについて、今年は特に寒く、停電すると辛いと思う。太陽光パネルが最近増えているが、10年後20年後に産業廃棄物として若者の負の遺産になるのではないかと不安を感じる。パネルは再利用が難しく、埋めるしかないという話もきく、考える必要がある。また、宗田先生のお話から、人口を増やすために、外国人の定住という考えもあると改めて感じた。実際に、町には外国人労働者が多い。町民と外国人労働者の交流はあるのか。

事務局：国際交流協会ですでにできているときいている。

委員：あまり交流をしているということを感じたことがない。そこを変えていく必要がある。外国の方が定住するには、住民との交流が重要。また、スマホが使える人と使えない人の格差が大きくなっていると感じる。高齢者が多い京丹波町では、スマホ・パソコンを軸とした施策に特化すると、そこからこぼれ落ちる方が出てくると思う。

委員：農産物のブランド化に大変期待をしている。基礎調査の資料3で、本町の農業産出額についてのデータもあったが、それだけ町の農産物そのものに魅力があるということ。ブランド戦略ということ言えば、加工品の製造や飲食店での活用など、総合的な戦略的な取組が必要になる。そこにはふるさと納税の返礼品も関わってくる。その辺りを、黒豆なら黒豆そのものと加工品、お菓子など、一つの素材を様々な形にデザインし、展開していく必要がある。同時に宣伝・観測、マーケティングをどのようにやるかという点も重要。役場なら、農林、にぎわい等、連携してブランド戦略をデザインしていくような動きを展開していただきたい。

委員：自身は13年前に愛知県から移住し、新規就農した。前回も言ったが、遊休農地が目に見えて増えている。新規就農者を増やさないと、稲の維持管理も先行きが不安。移住促進にもっと計画的に取り組んでほしい。和知では猿の被害も多い。柵などの対策はしているが、まったく効果がない。今どこに猿がいるとか、そうした情報を共有できるシステムを作ってもらえれば、作物を猿から守ることができるのではないか。また、女性でも身体に負担のない、腰などを傷めずに健康に農作業ができるようなスーツ（スマートアシスト）の普及など、デジタル化も進めてほしい。

委員：質美小学校が閉校して活用を始めてから、10年になる。緊急事態宣言中であっても、質美小学校にはたくさんの来館者が訪れている。特に小さな子供連れの家族が多い。小さなお子さんの家族は安心・安全に過ごせる、心地の良い空間を求めていると感じる。京丹波町には丹波自然運動公園もあるので、そちらでたくさんの方が過ごせる場所、新しいフィールドアスレチックもできた。楽しめる場所の選択肢が増えたことはいいこと。よそからこられた若い方や、お子さんたちが、滞在時間を伸ばし、京丹波町をよく知っていただき、また来たいと思えるようになれば、住んでもいいという方も増える。そうした方をもっと増やせないかな、と思う。すばらしい新庁舎ができ、交流ラウンジもでき、ネット環境も整い、子どもが本に親しむこともできるようになった。京丹波町産の木材が使われたことも誇りに思うし、アピールしていき

たい。そうした木育に関しても、身近な暮らしの中で京丹波町産の木材の温もりを感じられるような取組をしていただきたい。また、「食の」と以前からおっしゃっているが、農産物はおいしく、自慢できるものがあるが、その次の加工食品、レストラン・カフェの数が少ないことが残念。もっと選択肢が増えると良い、そこが弱いと思う。デザインやセンスが重要で、SNSで映えるようなものがなければ、なかなか難しい。せっかくがんばっているのに、十分に活かされていないように感じる。がんばりが的外れにならないように、みなさんと知恵を出し合って考えていきたい。

委員：京都トレーニングセンターでも理化学サポートの体制が整備されている。町長のウェルネス構想の一環として、利用も増えると思う。丹波自然公園はアンケートでも魅力のある施設となっている。子どもの体力強化などを支援できる体制も整備していきたい。魅力のPRも役割の一つ。ワーケーション、森の京都についても、もっと有効にPRしていく必要がある。ヤマガタヤの跡地についても京丹波町をPRするには非常によい場所である。総合計画については、子育てしやすい環境、高齢者が安心して過ごせる環境、若者が暮らせる環境をつくることが重要と感じる。

委員：実施計画への意見書について、おおざっぱに考えていた面がある。やはり部会である程度議論した方がよかったのではないかと感じている。もう一点、和知の河岸段丘について、町民でもその場所を知らない方も多。PRの不足があると思う。自身も和知に住んでいて、良さを十分に感じていない面もある。どのようなことをどうPRするかが重要。

事務局： ただいまいただいたご意見含め、先生から

宗田教授： 和知の河岸段丘については、自身を含め外の者はいつも褒めるが、地元の方からはいつも今のような反応がある。残念であるが、今後もPRを続けたい。谷委員がおっしゃった食の面では、島根県でぐるなびの社員が地域に入って、全国にブランド化を展開する取組をした事例がある。ぐるなびとしては社員教育という位置づけだが、京丹波町でもそうした取組ができるというのではないか。また、委員からあった、外国人をどう迎え入れるかを真剣に考えるということは重要。共生計画を策定した自治体もある。技能実習生に対しても、受け入れの取組をし、祭りや収穫に参加いただくという形もある。実習生の多くは、日本にあこがれている。日本の店舗の商品の半分は中国製で、中国でも買えるが、日本の方が信用できると考えている。移民から市民、あるいは町民に、そのためのシナリオを作ってはどうか。町民になるためのプロセスを踏む中で、日本語も上手くなるという流れを作ってはどうか。また、スマート農業の取組、女性の就農者にスマートスーツを着せて、という提案は良いと思う。それほどお金もかからない。事業化し、京丹波町で体験できるようにするというのも、ブランド化とセットで良いのではないか。また、温暖化について、ニュートラルでなく、オフセットにするということも重要。豊作貧乏というお話もあったが、そうした農家と京都市内の子ども食堂とつなげていただくというのではないか。京都銀行のお力でできないか。ブランド野菜をつくることを表として、裏で余った野菜を集めて子ども食堂に提供すれば、イメージも良いのではないか。観光の標識について、国道事務所に言えば、日本風景街道と言うプロジェクトもあるので前進するかもしれない。味夢の里を受け入れた京丹波町は、国土交通省の覚えもいなので、協力してもらえないのではないか。また、町営住宅が空いているのなら、所得制限も議会で改定できるのではないか。三ノ宮の町営住宅についても、母子家庭を受け入れるモデルを作った先進的な事例がある。定年後に地域に帰ってくるかについては、例えば雲南省の市長もすごく真剣に考えて

いる。定年退職後の夫婦が帰ってくるための施策を、京丹波町でも考えるというのもあると思う。鳥獣被害については、世界的な傾向で、ドイツやイタリアでも被害が出ている。

委員：自身が見た猿は、子どもも多かった。和知の人口よりも多いと感じる。

宗田教授：自身の居住地の公園でも鹿が多い。これまで奈良公園のように、子どもが餌をやっていたが、ついに餌やりを禁じることになった。鳥獣被害の問題は、和知や京丹波だけで解決できる問題ではない。京都の送り火でも鹿の問題がある。しばらく被害は続くかもしれないが、農水省も取り組みを進めているので、支援策含めアンテナを立てていく必要がある。

事務局：協議事項は以上となる、次に移る。

5. 次回の審議会について

6. 閉会

副会長：宗田先生には、非常に参考になる講演をいただき、ありがたい。また、委員の皆様には長時間に及ぶ協議の中で有意義なご意見をいただき、感謝している。コロナの中で、様々な活動に制限が出ており、総合計画の策定においても、影響があったことと思う。今後もウィズ・コロナ、アフター・コロナの取組が重要になると思うが、より良いまちづくりに向けて検討を進めていきたい。

以上